

ミゾゴイ 英: Japanese Night Heron

学: *Gorsachius gorsaggi*

1. 分類と形態

分類: サギ目 サギ科

全長: 約490mm 尾長: 92-116mm

全嘴峰長: 34-41mm ふ脰長: 64-73mm

体重: 470-530g

※計測値は(清棲 1978, 内田 1996, del. Hoyo *et al.* 1992, Dunning Jr. 2008)を参考にした。

羽色:

成鳥では、頭部は鮮やかな赤栗色を、背中、翼、尾羽では暗褐色を呈する(写真1)。喉から腹はクリーム色で黒い縦斑が入り、特に喉では黒く長い筋状になる。雌雄では特に羽色の違いはない。若鳥では、上面の褐色が暗く、頭部や翼に細かい黒斑が多数見られ、翼では細かい白斑が入ることもある(写真2)。

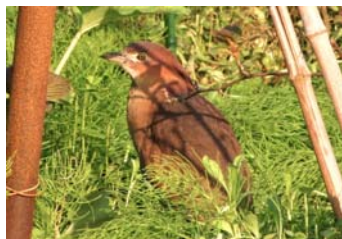


写真1. ミゾゴイの成鳥。地味だといわれるが、きれいですよ。
【Photo by 藤原岳浩】



写真2. 若鳥の頭部はまだら。嘴が短いのがよくわかる。

鳴き声:

低い声でポォー、ポォーと連続して鳴く。遠くから聞くと、プー、プーとも聞こえる。連続は、数回のこともあれば100回を越えることもある。これを単位として、休止を入れながら繰り返す。日没直後及び日の出前の2時間程度に鳴くことが多い。営巣の前に1〜2週間程度の間集中して鳴くことが多いが、渡りの中継地でも鳴き声が聞かれることがある。孵化後1週間程度の時期にも鳴くことがある。

2. 分布と生息環境

分布:

本州、四国、九州の標高1000m以下の森林を主な繁殖地としている。過去に1例のみ台湾での繁殖記録があるが(BirdLife International 2001)、基本的に近縁種のズグロミゾゴイと繁殖分布が分かれている。北海道でも本種の観察記録があるため、繁殖している可能性も否定できないが、十分な調査が行われていない。

生息環境:

広葉樹林、針広混交林を繁殖地として利用することが多い。特にコナラなどの落葉広葉樹林でよく観察される。沢沿いで営巣や採食をすることが多い。これは、沢の周辺では土壌が厚く湿潤であるため、食物となるミズやサワガニなどの資源量が多いためだろう。

3. 生活史

繁殖システム: 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月
越冬期 渡り 繁殖期 渡り 越冬期

繁殖期は営巣地に渡ってきた直後の4月上旬から始まるが、渡りの時期に個体差があるようで、6月から繁殖に入る個体もいる。繁殖に失敗した個体は、巣

の位置を移動して再営巣することが多く、遅い個体では8月下旬に巣立ちする例もある(小宮・杉田1975)。通常一夫一妻で繁殖し、抱卵や給餌などは雌雄ともに行う。

巣:

戦前の報告では、スギやヒノキが主要な営巣木とされているが(川口 1937, 山階 1941)、最近では、コナラやケヤキ、サクラなどの広葉樹への営巣例が多い。ただし、地域によってはマツを好んで営巣する例もある(蔵原 1991)。巣は、直径40〜50cmほどの皿形で、横に張り出した枝のY字に分岐した場所につけられる(写真3)。地上からの高さは5〜15m程度のことが多い。集団営巣はせず、森林内で単独営巣する。巣の上方は林冠により上空から隠れ、下側には空間が空いており見えやすいところに営巣することが多い(山階 1941)。巣の下には、尿酸部分がクリーム色っぽい糞が大量に落ちている。



写真3. ヒナを守りながら巣内から撮影者に擬態をするミゾゴイ。

卵:

一腹卵数は3〜5卵で、白色である。直径約43〜49mm、短径約35〜38mm(山階 1941)。

抱卵・育雛期間:

抱卵期間は20〜27日、育雛期間は34〜37日である。初卵産卵後から抱卵を開始するため、孵化時期はそろわず、ヒナの体サイズには差が生じることが多い。

渡り:

主な越冬地はフィリピンと考えられるが、東南アジアの各国で観察記録がある。渡りの季節には、韓国、中国南部、ロシアなどでも観察されることがある(BirdLife International 2001)。3月から6月頃に繁殖地に到達し、9月から11月頃に繁殖地を脱つようだ。渡りの中継地では、1〜2羽で観察されることが多く、単独またはつがいで渡っている可能性がある。ただし、ゴイサギやアオサギなど1000羽を越えるサギの混群の中に、150個体以上のミゾゴイの可能性のあるサギが混じっていたとの観察報告もあり(榎本 1927)、今後の調査が必要である。越冬地や渡りの経路を含め情報が不足しており、詳細については不明点が多い。

4. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● ナイトヘロンは夜行性?

ミゾゴイは公園や農耕地で観察されることもあるが、主要な生息場所は森林である。林冠上を飛ぶことは少なく、林床を歩きながら採食していることが多い。何時間も地上で過ごし、時には30分くらい立ち止まっている。こんな鳥なので、見つけるのは一苦労である。しかし、この鳥は夜にはよく鳴くので、耳で見つけることができる。昼に観察されず、夜に鳴き声が聞かれ、おまけに英語名がナイトヘロンである。ついつい「夜行性」と思ってしまい、そのように書かれている文献もある。しかし、本当にそうだろうか。

生態図鑑

実はミゾゴイではきちんとした夜間採食の報告はない。これに対して、昼に採食している姿は、野外でも多数観察されている。また、最近の報告では、飼育下の個体が昼間に採食行うことが示されている(川名 2009)。夜に鳴いていることは間違いない事実である。ただし、状況証拠からは「夜行性」と言い切るには不足である。これまでの知見を冷静に見ると、基本的に夜は鳴くだけで、昼に活動するという姿が見えてくる。山階(1941)では「日没前後に棲息所を飛び出して溪流の付近にて食を求め、日中は棲息所たる林の中に休息して居る。」と書かれている。私の観察では、育雛期が進むと、昼間は親が交替で巣にいるが、夜間は両親とも巣から離れるという時期があった。山階氏の観察は、この時期の行動を見たのかもしれない。

図鑑によっては、「雨や曇りなど、薄暗い日は、昼間も採食する」と書かれている。「夜行性」という意識があると、昼間の採食を見ても例外的な行動と納得してしまうのかもしれないが、私の見ていた限りでは普通に毎日昼間に採食していた。比較的活発に活動し観察しやすい繁殖期が、梅雨と重なっているため、雨天時に採食する姿がよく見られるのも事実といえ事実だ。逆に今の私にはミゾゴイは昼行性という先入観がある。この思いこみが、今後の調査に影響しないように肝に銘じておきたい。

● 魚が好きとは限らない

サギというと、魚を捕るイメージがつきまとうのは、シラサギ類やゴイサギ類が日本人の生活の中でなじみ深いからだろう。しかし、ミゾゴイの主要な食物は、ミズを中心とした土壌動物で、サワガニや昆虫、陸産貝類などを採食している(図1, Kawakami et al. 2005)。ミゾゴイのくちばしを他のサギ類と比べると、太く短いことが伺える。一般に魚を食べる鳥ではくちばしが長いが、これは魚類を遠くから素早く捕るためと考えられる。ミゾゴイのくちばしは、魚を捕獲するには適しておらず、形態的にも土壌動物食であることに納得がいく。図鑑によっては、ミゾゴイの食物として魚類をあげている場合があるが、実際に魚を食べる頻度は極めて低いだろう。

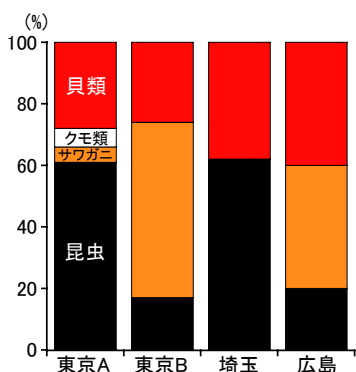


図1. 4巣におけるペリット分析の結果。ミズは主要な食物だが、消化されるため反映されていない。貝類のほとんどが陸産貝類。Kawakami et al. (2005)を改変。

● ミゾゴイが絶滅する日

ミゾゴイは20世紀中期以後、全国的に個体数が減少傾向にあると考えられる(Kawakami & Higuchi 2003)。山梨県の久那土では1950年頃にはそれぞれの沢に1ペアずつの営巣が確認されていたが、1990年頃にはほとんど見られなくなっている(日向1949, 1993)。三宅島など他の地域でも、以前に比べて最近では観察される頻度が激減しているようだ。20世紀後半には、多くの夏鳥の減少傾向が報告され

ており、越冬地である東南アジアの森林減少が原因と考えられている。ミゾゴイの越冬地であるフィリピンでも、20世紀後半に劇的に森林率が低下しており、個体数減少の主因となっている可能性が高い。また、この時期は、国内でも広葉樹林が減少しスギ・ヒノキの人工造林地が拡大した時期でもあり、好適な繁殖環境の減少も個体数減少の一因と考えられる。

● 千羽鷺はホント？

ミゾゴイの個体数については、これまでに十分な調査がされたことがなく、一部では個体数が1,000羽以下と記載されている場合があるが、科学的な根拠は示されていない。仮に繁殖に参加している個体数が1000個体=500ペアとし、本州、九州、四国の標高1,000m以下の森林面積を20万km²とすると、その密度は400km²=20km×20kmあたりに1ペアとなる。ミゾゴイは確かに個体数が減少しており非常に密度が低い、これまでに調査をしてきた経験から考えると、これは過小評価の可能性が高い。個体数の少なさは、保全策を進める上では追い風になるかもしれない。しかし、研究が進み実際の生息数がより多いとわかった場合、文献に1,000羽と書かれていたものが、仮に10,000羽いることがわかったとなると、個体数が10倍に増えたかのような印象を与えてしまう。個体数の過小評価は非常に危険なので、やめましょう。

5. 引用・参考文献

- BirdLife International. 2001. Threatened birds of Asia: the BirdLife International red Data Book Part A. BirdLife International, Cambridge.
- del Hoyo, J., Elliott, A. & Sargatal, J. 1992. Handbook of Birds of the World, Volume 1. Lynx Edicions, Barcelona.
- Dunning, J. B. Jr. 2008. Avian Body Masses. CRC Press, Boca Raton.
- 榎本佳樹. 1927. サギ類の渡り. 鳥獣報告集 3 (5): 13-15.
- 日向富士雄. 1949. ミゾゴイの観察. 野鳥14 (9): 19-22.
- 日向富士雄. 1993. 夏鳥を迎えた喜びは、今. In: 遠藤公男(編) 夏鳥達の歌は今. 三省堂, 東京.
- 川口孫治郎. 1937. 日本鳥類生態学資料. 巢林書房, 東京.
- Kawakami, K., Uchida, H. & Fujita M. 2005. Diet of the Japanese Night Heron *Gorsachius goisagi* in Japan. Ornithological Science 4: 173-177.
- Kawakami, K. & Higuchi, H. 2003. Population trend estimation of three threatened bird species in Japanese rural forests: Japanese Night Heron *Gorsachius goisagi*, Goshawk *Accipiter gentilis* and Grey-faced Buzzard *Butastur indicus*. Journal of Yamashina Institute for Ornithology 35: 19-29.
- 川名国男. 2009. ミゾゴイの非繁殖期における飼育下での採餌行動. 山階鳥類学雑誌 41: 62-64.
- 清棲幸保. 1978. 日本鳥類大図鑑III. 講談社, 東京.
- 小宮輝之・杉田平三. 1975. ミゾゴイの繁殖-野生での観察. 動物と動物園24: 24.
- 蔵原惟光. 1991. 渡良瀬川の野鳥. やまいぼ社, 足利市.
- 内田博. 1996. ミゾゴイ. In: 樋口広芳ら(編) 日本鳥類大百科鳥類1. 平凡社, 東京.
- 山階芳麿. 1941. 日本の鳥類と其の生態第二巻. 岩波書店, 東京.

執筆者

川上 和人 森林総合研究所



ミゾゴイとおつきあいを始めて、もう10年。キョロちゃんと似ているなあという思いはどんどん強まっています。森永製菓さん、是非ミゾゴイパッケージのチョコボールを作ってください。